
春雷

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春雷

【Nコード】

N8116K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

井上頼子には息子がいる。

井上頼子は今日も足を棒にして、下着の訪問販売をする。昔は学校なんかでも随分売れた。放課後の職員室に入れてくれた。学校の先生は金に糸目をつけなかった。買う暇がないと言って、1枚5千円ぐらいのガードルやらブラジャーが良く売れた。

だが、開かれた学校のはずが、訪問販売には厳しくなった。保険外交員の沢村さんもこの頃は簡単には入れてくれないと嘆いていた。では会社はどうかというと、それも同じく厳しくなつて、受付段階で断られてしまう。飛び込みで買ってもらえるという会社は、本当に一握りになった。

頼子は45歳。もう息子は18歳になった。夫とは10年前に離婚した。夫は優しくかったが、ギャンブルが好きでパチンコ、競馬に夢中だった。そして、案の定借金まみれで協議離婚になったが、優しい夫から息子は離れようとはしなかった。だが、生活費もない夫と暮らすわけにはいかず、頼子が育てることにした。息子は夫を見放したと思っているから、頼子には心を閉ざすようになった。

頼子は子供を愛していても、べたべたすることが苦手で、子供と遊ぶようなことはあまりしたことが無かった。公園や競馬場に連れていくのは夫、頼子は家で本を読むほうが良かった。参観日も夫が行くと決めると、頼子は二人も行くことはない仕事した。やがて出かけるのは子供と夫、頼子は一人という構図ができた。だから、借金に追われるようになると、頼子が引きとることになった。

そして10年。

夫が目の前に現れたのだ。

「頼子」

玄関の力ギを開けると、後ろからそう呼ばれた。振り返ると元夫の雄だった。

「元気だったか」

「ええ、どうしてるの。入ったら」

「ああ」

嫌いになって別れたわけではないから、懐かしかった。一雄は県外で農業をしていると言った。田舎に住むということで安い住宅を村役場から提供してもらってるという。

「手紙をもらってね」

差し出したのは一郎からの手紙だった。それは、何通もあった。

「えっ、あの子が手紙を？」

シヨックだった。頼子とは心の通う会話などしたこともないし、必要最低限の金の話や学校に出す書類について話すぐらいだった。頼子でも知らない一雄の住所をどうして知ったのか、そして、二人は頼子をのけて、二人で文通してたなんて。寒い隙間風が心の中を通り抜けていく。10年、いや、あの子が生まれてきて18年。

「あなたには何でも話すのね」

「さあ、それは分からない。とにかく、これを読んでみてくれ」

「あなた宛てのものなのに。私が読んでいいのかしら」

「読んだ方がいい。雑誌に投稿したものを偶然に見たらしくて、手紙をくれたのが始まりさ」

「そう、まあ、コーヒーでも淹れるわ」

読みたくなかった。怖かった。父親に一体なんて訴えているのか。自分の子育てを否定するようなことが綿々と綴られてる気がした。離婚して10年。あの子と二人で10年。寂しいことは知っていた。でも、どうやって話せばいいのか分からなかった。学校でも問題の一つも起こすことなく、いいお子さんですとずっと言われ続けてきた。嬉しかったがいたずらの一つもある方が、人間味があるようにでと贅沢な願いを持つこともあった。

コーヒーを差し出すと、一雄はうまいと言いながら飲んでいた。少し白髪が見えたが温和な顔が昔より優しそうに見えた。この人はいい10年を過ごしたのだと頼子は思った。

恐る恐る開くと、几帳面な字が並んでいた。

「父さん、僕は今度大学へ進学します。将来は教員になろうと思っています。母さんは毎日疲れて帰ってきます。僕は母さんの背中に向かって、いつも声を掛けようと思っています。母さんはあのとから、僕にすまないという目でいつも見るから、ついついつけんどんになります。」

でも、この年まで僕を一人で育ててくれたことには感謝の気持ちしかありません。父さんは好きだったけど、しんどい時にずっといてくれたのは母さんだったから。休みの日に父さんが連れて行ってくれた競馬場やパチンコは子ども心には楽しいところだったけど、あの時間、母さんは一人だったよね。大人に近づくにつれて、母さんは本を読んでいるようで読んでいなかった。いつも、同じ本を手元においていた。あの本は父さんの本だったんだね。

最近、やつと父さんのペンネームだつて知つたよ。母さんは父さんの仕事を作家としか言わないから。数冊読んだけどあまり才能があるとは思えないよ。毒舌で悪いけど。今の農業があつてるよ。でも、母さんは作家の父さんが好きだったんだね。もう一度二人が暮らすことは考えられない？僕はこれから大学へ行くし、父さんもギャンブルはしてないみたいだし、母さんはずっと一人だよ。一度、来てみない？ 10年。もういいんじゃない。一郎」

手紙を置くと、頼子はしばらくぼうつとしてしまった。あの子は心を開かないと思い込んでいた、自分の狭い心。いつも自分をヒロインにしていた。借金もつれの夫から子供を引きとつてあげたと。支えられていたのは母親の方で、息子はずっと大人だった。頼子は声を押し殺して泣いた。

「何やってたんだろう、私、一郎に、一郎に……」

「いや、育ててくれたのは君さ。きつと知らないだろうと思って、見せたかったんだよ、この手紙」

「本当に、馬鹿な母親で恥ずかしい」

「違うよ、君を責めてなんか誰も責められないよ。僕は感謝してる

し、一郎もだよ。今度、君が一人になるし、僕の仕事も安定したから会ってみたらという提案さ。気がきくな」

「そうね」

「今更どうぞもう一度とは言えないけど、茶飲み友達なら。借金はもうないよ。貯金は少しだけど、村の空き家を提供してもらえそう。その改装費はかかるけど、それぐらいは持つてるよ」

一雄の話をじつと聞きながら、手紙を握りしめた。この子の悩みをきくと聞いてくれたんだ。この人は手紙の中で心を温めてくれたんだ、育てたのは二人でかもしれないとぼんやりと考えていた。

「一体、何を読んでいたんだい」

「あなたが唯一賞をいただいた本、『愛を失くして』よ」

「ははは、これは参った。確かに失くしたな。大切なものを。別れてからずっと想っていたよ、君と一郎のこと」

「ただいまー」

一郎だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8116k/>

春雷

2010年10月8日14時18分発行